

国境を超える高校から大学への移行における「家族の教育戦略」効果の検討

比較教育社会学コース 張 梅

Family Strategy in Educational Attainment Process in self-financed overseas students
from China gain entry to Japanese universities

Mei ZHANG

The aim of this study is to clarify the effect of “education strategy of the family” in the transition to Japanese universities from foreign high school.

Interviews were carried out with 40 self-financed students from China. We found that parent from different social class have different expectations about their child studying in Japan. Investments in education and expectations of parent have a significant impact on the Educational Attainment of children in Japan. Between the students from a wealthy family who can afford to study abroad easier, and international students hard to afford to study abroad, a significant difference was observed in the education attainment, students with higher educational expectations of parents, and smaller economic pressure, can gain more success in education attainment in Japan.

目 次

1. 問題の所在
 2. 研究の視点
 - 2.1 人的移動の一つとしての留学生移動
 - 2.2 留学生移動という行為を支える家族の教育戦略
 3. 分析データの概要
 4. 日本留学に余裕がある家庭における留学戦略
 - 4.1 エリート階層の家庭における留学戦略
 - 4.2 中産階層の家庭における留学戦略
 5. 日本留学に余裕がない家庭における留学戦略
 - 5.1 労働者階層の家庭における留学戦略
 - 5.2 貧困階層の家庭における留学戦略
 6. 結語
-
1. 問題の所在

グローバリゼーションの進行が与える人々への影響は想像以上に大きい。近年のグローバリゼーションを表す言葉の一つとして「人的移動」が挙げられ、人的移動は質・量ともに大きく変容した（Held et.al., 訳書2006¹⁾、平野2008²⁾）と指摘されている。21世紀は人的移動の世紀とも表現される21世紀において、人的移動のなかでも特に注目されているのは留学生移動の増加であり、今日では200万以上の学生が母国以

外の大学で学んでいる。今後も国際的な学生移動がさらに活発化していき、2025年における世界の留学生総数は720万人にも及ぶこと、そして、アジアが最大の留学生市場になることが、予測されている（IDP Education 2003）³⁾。

Richters & Teichler（1996）⁴⁾によれば、留学生移動は、その移動の方向性により、大きく2つに分類できる。すなわち、「教育の質の低い国から質的に優れた国への移動（垂直移動）」と、「教育の質がほぼ同じ国への移動（水平移動）」である。近年、留学生移動が発展途上国から先進国へとばかりではなく、発展途上国間の水平移動の循環化も増えつつある（DeWit et.al., 2008⁵⁾、杉村美紀2010⁶⁾）という主張もあるが、OECD（2006）⁷⁾によると、2006年における世界の留学生総数は290万人のうち、発展途上国から先進国への国際的學生流動は全体の70%を占めている。この結果から、依然として垂直移動が留学生移動の主流であることが分かる。

垂直移動における送出側の大国として注目されるのは中国である。中国は世界最大数の留学生を送り出す国であり、アメリカのほか、日本においても中国人留學生が留學生全体数の高い割合を占めている。日本に来ている留學生の構成を見ると、2013年留學生の総数は135,519人（日本語教育機関の在籍者を除く）であり、そのうちアジアからの留學生が124,542人で全体の91.9%までを占めており、なかでも中国からの留

Table 1 出身地域別留学生数上位5位

| 地域 | 留学生数 (人) | 構成比率 |
|------|----------|-------|
| アジア | 124,542 | 91.9% |
| 欧州 | 2,391 | 3.5% |
| 北米 | 2,391 | 1.8% |
| 中近東 | 1,233 | 0.9% |
| アフリカ | 1,155 | 0.8% |

Table 2 出身国(地域)別留学生数上位5位

| 国/地域 | 留学生数 (人) | 構成比率 |
|------|----------|-------|
| 中国 | 81,884 | 60.4% |
| 韓国 | 15,304 | 11.3% |
| ベトナム | 6,290 | 4.6% |
| 台湾 | 4,719 | 3.5% |
| ネパール | 3,188 | 2.4% |

データ出自：日本学生支援機構「International Students in Japan 2013」⁸⁾

学生がもっとも多い (Table 1, 2 参照)。

中国は発展途上国であり、近年経済の成長が著しいものの、人口規模が大きく、貧富の格差が深刻な問題になっていることは周知の通りである。中国人留学生が留学先を選ぶ際に、日本留学と欧米留学では、留学生の志向や目的が異なる。また、それらの留学を目指す主要な社会層も異なっている (坪井2006)⁹⁾。すなわち、欧米留学を選択するのは大半が中国富裕層の子どもで、日本に來ている留学生の多くは労働者階級の子どもの子どもであると指摘されている。このことから、坪井(2006)⁹⁾は日本を「大衆留学先」として位置づけるべきと主張している。このような「大衆留学」としての日本留学を可能にしたのは、量を重視した留学生受け入れ政策 (「留学生10万人計画」) であるという指摘もある (浅野2004)¹⁰⁾。さらに浅野(2004)¹⁰⁾は、アジア圏のなかで、当時の日本のような「自分で稼いで学べる」留学制度が中国の労働階級の子どもの先進的な教育機会を与え、日本企業が中国で現地生産する際に不可欠な中堅層を育成したことが重要な意義であると指摘している。

一方、日本の留学生受け入れ政策は変わりつつある。2003年以後『新たな留学政策の展開について (答申)』をはじめ、その後の2008年『留学生30万人計画』¹¹⁾のなかでもみられるように、留学生の量だけでなく、奨学金の拡充や英語で入試可能な学科の増加などを通じて優秀な留学生に日本への留学を呼びかけ、留学生の質を追求する姿勢がみられる。さらに留学生が卒業後に日本で就職することを支援し、留学生を日本に長期滞在/移住する「高度人材予備軍」(経済産業省2008, pp.115)¹²⁾として捉えるようになった。以上のような政府の試みにより、近年、来日している留学生はその質を大きく変えており、従来よりも多くの優秀な学生が日本に留学していると推測できる。

留学生の移動が増えるなかで、留学生移動と移動先での教育達成との関係については、十分に検討されて

きたとはいえない。留学生の移動研究については、移動先の国において起こる、留学生の生活構造や心理問題が主であり、たとえば留学生の家族的・階層的な背景と教育達成の関係について注目されてきたとはいいたい。

そこで、本稿では、留学生移動と家族の教育戦略という視点から、中国から日本へ移動した留学生たちの教育達成過程における家族戦略はどのようなものか、さらに家族の教育戦略が留学生の教育達成にどのような影響を及ぼすかについて検討し、日本と中国を移動する留学生を事例として、グローバリゼーションと教育の問題にアプローチすることを目的とする。

2. 研究の視点

2.1 人的移動の一つとしての留学生移動

Z. バウマン (Bauman 1998=2010)¹³⁾は、移動には分断があると主張し、グローバリゼーションが進む今、移動者は次の2つの世界に分けられると述べている。一つはグローバルに自由移動する人々の世界であり、この世界の人々は、空間から拘束されることはない。もう一つの世界は「地域に結び付けられた」人々の世界で、彼らの移動には制約がある。第一世界の人々は自由に行きたい旅先を選べる「旅行者」であるのに対し、第二世界の人々は、その閉ざされた空間から脱出することを目的とする「放浪者」になる。バウマンと同じく、平野(2007)¹⁴⁾は移動の可能性の多寡に注目し、移動者を「国際移動をする余裕のある人々」と「国際移動をせざるを得ない人々」とに分類している。

また、留学生移動も含め、人はなぜ移動するのかという問いについて、ハージ(2005)¹⁵⁾は、「存在論の移動性」という概念を導入している。彼によれば、人は元の場所で「うまくいっている」と感じる限り、移動を行わない。行き場がなくなった時あるいはさらに前進したい時、人は物理的に移動し始める。つまり、物

理的に移動する前に、存在論としての自分が、ほかの物理空間において、より可能性をもつと感じられた時、移動する。ハージ (2007=2007)¹⁶⁾は、国境を超える人的移動を「物理的移動性」ではなく、「存在論的移動性」とう側面から捉えるべきであると主張し、このような移動の「質」の重要性を強調している。すなわち、国境を超える移動は質的に同じものではなく、個々の移動経験は個人にとって意義が異なるものである。

これらの研究に即せば、「大衆留学」先と位置づけられる日本へやって来る留学生の中には、移動を行う余裕のある留学生と、閉ざされた空間から抜け出すことを目的とした余裕のない留学生が混在していること、そして個々の留学生の移動経験には質的な差異があり、その移動経験のもたらす本人にとっての意義も異なるということが考えられる。

2.2 留学生移動という行為を支える家族の教育戦略

文化的再生産論は再生産論の一つで、階級・階層の世代的再生産メカニズムを批判的に解明しようとする理論であり、1970年代に登場した。その理論は、文化自体の再生産問題と文化の再生産を通じた個人の階級・階層的地位の世代的再生産の問題を統一的に説明するものとして捉えられている (小内, 2005 p.178)¹⁷⁾。

この文化的再生産論をもっとも体系的に論じているブルデュ (1979=1990)¹⁸⁾によれば、階層再生産は機械的に行われるのではなく、個人や家族の戦略の結果であり、学歴取得の成功は、相続文化の資本の量と学校制度への投資傾向の大きさによって決まるとされている。

ブルデュの再生産理論に基づき、片岡 (2001)¹⁹⁾は学歴獲得競争の市場において、家族のとる教育戦略は以下の三つに分けられると主張している。すなわち、第一に、家庭環境を通じた文化資本を相続する文化的再生産論の文脈から見た、家族の文化的戦略、第二に、塾や予備校などの家族外教育投資戦略、第三に、少子化戦略である (p.256)。

また、小内 (2005)¹⁷⁾によれば、教育上の成功に対する意欲にも階級・階層が存在している。上流階級の親は教育に対して高い価値付けをするハビトゥスを持ち、庶民階級ではそうしたハビトゥスが希薄である。そのため、上流階級の親やその子供は教育上の成功を望み、より上級の学校へ行くための慣習行動を取るのに対し、庶民階級の親やその子供は教育上の成功に対してあまり強い意欲を持たない (p.181)。

上記の研究は上流階級の親が子どもをより上級の学

校に行かせる慣習行動について論じているが、一方 Waters (2006)²⁰⁾はインタビュー分析を通じて中産階級の留学戦略を論じている。そのなかでは、香港の中産階級の子供が香港でよい成績をとれず、有名大学への進学が難しいと親が判断した場合、親はその教育達成の危険性を避けるため、子供を香港より進学競争が激しくないカナダへ留学させることを選択すると指摘されている。欧米への留学を通じて、香港本土よりも価値が高い欧米学歴を手に入れ、最終的に香港の大手企業に就職させる。すなわち、自国での教育システムにおける失敗あるいは失敗の可能性を感じた場合、中産階級の親はその失敗を回復もしくは回避しようとする、そして回復/回避のルートの一つが子どもを海外留学させることである。

いいかえれば、自国より高い水準の海外教育を受けさせることは、余裕ある中産階層の再生産のための家族戦略である。海外の学歴 (特に欧米の学歴) は、本土の学歴よりも高い価値を与えられている場合が多い。そして、経済的制限により、裕福ではない家庭は海外 (欧米) の教育を受ける機会から排除されている。余裕のある階級は、自国の教育システムで失敗した場合あるいは失敗の可能性を感じた場合、海外の有名大学進学ルートを利用している。このように、海外の高等教育を受けさせることによって、従来の再生産を定着させることが可能になる。Waters (2006)²⁰⁾はこの現象を「国境を越える文脈における再生産」と呼んでいる。

しかし、彼の研究対象は香港からカナダへの留学経験を持つ人々である。香港とカナダとも英語圏であり、中学から日本へという非英語圏かつ異言語社会間の留学に対して、彼の知見はどれほど当てはまるのかについて懸念が浮かぶ。さらに、裕福でない家庭は欧米の教育を受ける権利から排除されるかもしれないが、「大衆留学先」としての日本へは、中国の裕福な家庭でも、比較的裕福でない家庭でも (労働者階級あるいは貧困階層) 留学することは可能であり、やはり Waters (2006)²⁰⁾の指摘とは異なる状況が見出せる。いいかえれば、非英語圏の「大衆留学先」である日本を選択した行為の背景には、どのような教育戦略があるのかについても明らかにすべきだろう。

他方、中国国内では、社会階層と高校階層に対応関係があることについて、一定の研究蓄積がある。すなわち、上層階層出身の生徒は重点高校、下層階層出身の生徒は非重点高校や職業高校へと配分されるシステムが機能していると指摘されている (張2007)²¹⁾。し

たがって、中国国内において、社会階層が高い生徒は家族戦略が機能し、より良い高校・大学に進学できる機会が多いことがわかる。

以上を踏まえて、来日している中国人留学生のなかで、出身階層の異なる家庭における家族教育戦略とはどのようなものなのか、そしてそれらの教育戦略は留学生たちの教育達成にどのような影響があるのかという問いを検討することを通じて、国境を超えて移動する留学生の教育達成の背後要因を明らかにすることを試みる。

3. 分析データの概要

本稿で分析するデータは、中国から来日した私費留学生へのインタビューデータである。インタビューデータは、2010年を中心に収集した日本語学校に在籍している留学生のデータと、2013年を中心に収集した大学受験対策塾に通塾している留学生のデータ、及び2012年を中心に収集した大学に在籍している留学生のデータである。特に2010年と2012年のデータについては、以後2014年5月まで、できるかぎりの対象にフォロー調査を実施した。インタビューは半構造化法を用い、事前に主な質問項目として、家庭背景、留学のきっかけ、来日後の進学と生活などに関する質問を用意し、インタビュー中はできるかぎり対話をする形で進めた。1回のインタビュー時間は45分～3時間前後である。収集したデータから出来る限り個々人のライフストーリーを作成した。

調査対象者の属性を簡単にまとめると、最初から海

外留学を志していた留学生も存在する一方で、中国の大学受験を失敗したことが留学のきっかけになった留学生も存在する。共通しているのは、18歳から20代前半で、中国の高校を卒業後に来日し、日本の大学への進学を目指していることである。本稿では、分析の際に、まずは「日本留学に余裕がある層」と「日本留学に余裕がない層」とに大まかに分類し、さらにそれぞれを「日本留学に余裕がある層」から「エリート階層出身の留学生」(表1)と「中産階層出身の留学生」(表2)；「日本留学に余裕がない層」から「労働者階層出身の留学生」(表3)と「貧困層出身の留学生」(表4)に類型化し、この四分類(図1)に沿って分析を進めた。表中の名前はすべて仮名である。

4. 日本留学に余裕がある家庭における留学戦略

4.1 エリート階層の家庭における留学戦略

本稿の分析対象者のうち、親の学歴／職業からエリート階層に属していると分類された事例は11事例である。日本を留学先として選んだ理由として主に語られたのは、「中国の大学より、日本の高等教育が優れているから」ということである。ある意味でこれは当たり前の理由かも知れないが、親が早い段階で子どもを海外先進国の教育を受けさせたいと考えていたことを多くの留学生が語っている。

【事例1 楊 (NO.1)】

親がずっと前から私を留学させたがっていたが、私は最初それほど外国に行きたいわけではなかった。私の家は大学キャンパスの中にあるか

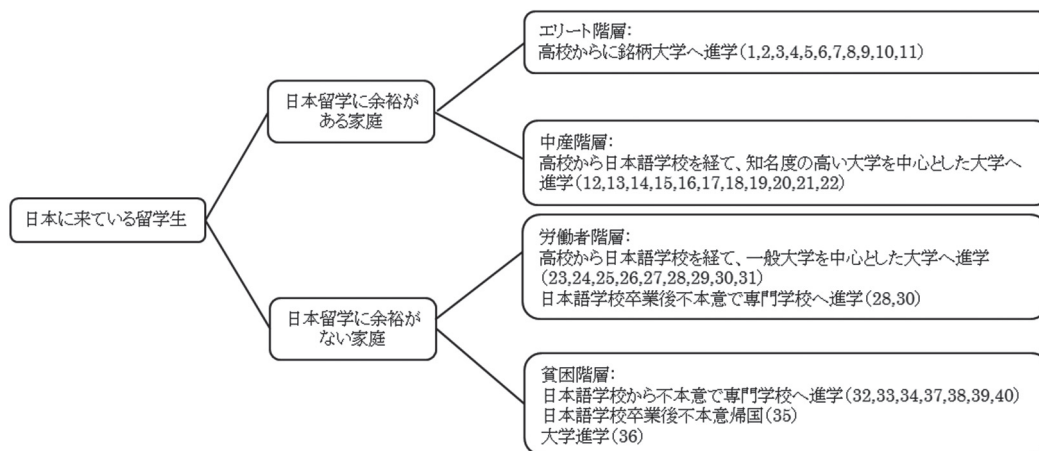


図1 日本に来ている留学生の家庭背景と進学達成

表1 エリート階層出身の留学生の概要

| 番号 | 名前 | 性別 | 出身 | 親の学歴 | 親の職業 | 兄弟有無 | 高校の形態 | 日本語学習開始時期 | 日本語学校歴の有無/期間 | 進学希望 | 日本での進学先 | 高校から大学への移行歴 | 卒業後の希望/現在の状態 |
|----|----|----|----|----------------|-----------------------|------|-----------|-----------|--------------|------|---------|-------------|------------------|
| 1 | 楊 | 男 | 大連 | 父 修士 母 修士 | 父 政府の役員 母 大学教授 | 無 | 私立中高一貫進学校 | 高校三年 | なし | 大学 | 国立大学 | 高校～大学 | 進学/アメリカの大学院在学 |
| 2 | 王 | 男 | 大連 | 父 修士 母 修士 | 父 大学教授 母 私立高校教員 | 無 | 私立中高一貫進学校 | 高校三年 | なし | 大学 | 国立大学 | 高校～大学 | 進学/国立大学院に進学決定 |
| 3 | 王 | 男 | 瀋陽 | 父 博士 母 修士 | 父 大学医学部教授 母 公務員 | 無 | 公立中高一貫進学校 | 中学三年 | 有/0.5年 | 大学 | 国立大学医学部 | 高校～半年受験～大学 | 病院で就職/医者 |
| 4 | 顧 | 女 | 瀋陽 | 父 大学 MBA(米) | 父 会社の役員 母 公務員 | 無 | 公立中高一貫進学校 | 中学三年 | 有/0.5年 | 大学 | 国立大学歯科 | 高校～半年受験～大学 | 病院で就職/研修歯科医 |
| 5 | 李 | 女 | 瀋陽 | 父 大卒 母 大卒 | 父 大学医学部教授 母 医者 | 無 | 公立中高一貫進学校 | 中学三年 | 有/0.5年 | 大学 | 国立大学医学部 | 高校～半年受験～大学 | 病院で就職/研修歯科医 |
| 6 | 馬丁 | 男 | 広州 | 父 修士 母 修士 | 父 会社役員 母 公務員 | 無 | 公立進学校 | 来日直前 | 有/1.5年 | 大学 | 国立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 就職/大学在学 |
| 7 | 安 | 女 | 安徽 | 父 大卒 母 大専卒 | 父 医者 母 無職 | 有 | 普通高校 | 来日直前 | 有/1.5年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 進学/アメリカの大学院在学 |
| 8 | 李 | 男 | 北京 | 父 修士 母 大卒 | 父 大学教授 母 大学教授 | 有 | 私立進学校 | 無 | なし(英語入試) | 大学 | 私立大学 | 高校～大学 | 進学/アメリカの大学院に進学決定 |
| 9 | 潘 | 女 | 蘇州 | 父 大卒 母 大卒 | 父 公務員 母 公務員 | 無 | 公立進学校 | 来日直前 | 有/1.5年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 就職/就職先決定 |
| 10 | 林 | 女 | 蘇州 | 父 大卒 母 高卒 | 父 外資社長 母 自営業 | 無 | 普通高校 | — | なし(英語入試) | 大学 | 私立大学 | 高校～大学 | 大学院/アメリカの大学院に在学 |
| 11 | 鍾 | 女 | 瀋陽 | 父 高卒 母 大専卒 | 父 公務員(日本駐在) 母 高校教師 | 無 | 公立中高一貫進学校 | 小2 | なし | 大学 | 私立大学 | 高校～大学 | 大学院(日本もしくは海外) |

表2 中産階層出身の留学生の概要

| 番号 | 名前 | 性別 | 出身 | 親の学歴 | 親の職業 | 兄弟有無 | 高校の形態 | 日本語学習開始時期 | 日本語学校歴の有無/期間 | 進学希望 | 日本での進学先 | 高校から大学への移行歴 | 卒業後の希望/現在の状態 |
|----|----|----|----|----------------|--------------------|------|-------|-----------|--------------|------|---------|-------------|-----------------|
| 12 | 常 | 女 | 江蘇 | 父 大卒 母 大卒 | 父 会社副社長 母 会社員 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/1.5年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 大学院/在学中 |
| 13 | コウ | 男 | 吉林 | 父 大卒 母 大卒 | 父 公務員 母 会社員 | 無 | 私立高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 国立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職/帰国 |
| 14 | 王 | 女 | 上海 | 父 大卒 母 大卒 | 父 社長 母 会社員 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/1年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 未定 |
| 15 | モウ | 女 | 南京 | 父 大卒 母 大専卒 | 父 会社役員 母 会社員 | 無 | 公立進学校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 帰国また日本で一時就職/在学中 |
| 16 | 平 | 女 | 河南 | 父 大卒 母 大専卒 | 父 公務員 母 教頭 | 無 | 公立進学校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 国立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職 |
| 17 | アイ | 男 | 山東 | 父 高卒 母 大専卒 | 父 会社員 母 会社員 | 有 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 公立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 大学院(日本)/大学在学中 |
| 18 | 張 | 男 | 北京 | 父 大卒 母 大卒 | 父 会社員 母 会社員 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/1.5年 | 大学 | 国立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 大学院(日本)/大学在学中 |
| 19 | タン | 女 | 山西 | 父 大卒 母 大卒 | 父 医師 母 公務員 | 無 | 私立進学校 | 中3 | 有/0.5年 | 大学 | 国立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 大学院(日本)/大学在学中 |
| 20 | 華 | 男 | 山東 | 父 大卒 母 高卒 | 父 弁護士 母 専業主婦 | 無 | 公立進学校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 国立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職/就職 |
| 21 | 李 | 男 | 瀋陽 | 父 大専卒 母 高卒 | 父 公務員 母 公務員 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職/大学在学中 |
| 22 | 沈 | 女 | 広州 | 父 高卒 母 大学院卒 | 父 会社員 母 自営業(離婚) | 無 | 私立進学校 | 来日直前 | 有/3年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職/不明 |

表3 労働者階層出身の留学生の概要

| 番号 | 名前 | 性別 | 出身 | 親の学歴 | 親の職業 | 兄弟有無 | 高校の形態 | 日本語学習開始時期 | 日本語学校歴の有無/期間 | 進学希望 | 日本での進学先 | 高校から大学への移行歴 | 卒業後の希望/現在の状態 |
|----|-----|----|----|---------------|-----------------|------|-------|-----------|--------------|------|---------|------------------------|-----------------|
| 23 | 呉 | 男 | 雲南 | 父 高卒 母 大専卒 | 父 自営業 母 会社員 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職/日本で就職 |
| 24 | 陳 | 男 | 四川 | 父 大卒 母 高卒 | 父 会社員 母 工場 | 無 | 公立進学校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 公立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 大学院(日本)/学部在学中 |
| 25 | 金 | 女 | 吉林 | 父 高卒 母 高卒 | 父 公務員 母 専業主婦 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職/アメリカで交換留学 |
| 27 | 包 | 女 | 山東 | 父 高卒 母 高卒 | 父 会社員 母 会社員 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 大学院(海外)/帰国 |
| 28 | 王 | 男 | 四川 | 父 大卒 母 高卒 | 父 会社員 母 会社員 | 無 | 普通高校 | 無 | 有/1.5年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～ 専門学校～大学 | 大学院/大学在学中 |
| 29 | 黄 | 男 | 吉林 | 父 専門卒 母 高卒 | 父 公務員 母 パイト | 無 | 普通高校 | 無 | 有/1.5年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職/学部在学中 |
| 30 | 趙 | 男 | 瀋陽 | 父 高卒 母 高卒 | 父 会社員 母 自営業 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/1.5年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～ 専門学校～専門学校 | 日本で就職/不明 |
| 31 | キョウ | 男 | 河南 | 父 高卒 母 大専卒 | 父 社長 母 不明 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 私立大学 | 高校～日本語学校～大学 | 日本で就職/Y飲食店開店 |

表4 貧困層出身の留学生の概要

| 番号 | 名前 | 性別 | 出身 | 親の学歴 | 親の職業 | 兄弟有無 | 高校の形態 | 日本語学習開始時期 | 日本語学校歴の有無/期間 | 進学希望 | 日本での進学先 | 高校から大学への移行歴 | 卒業後の希望/現在の状態 |
|----|-----|----|----|-----------------|---------------------|------|-------|-----------|--------------|------|---------|------------------------|-------------------|
| 32 | 金 | 男 | 吉林 | 父 高卒 母 中卒 | 父母 自営業 | 有 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 私立大学 | 高校~日本語学校~ 専門学校~大学 | 日本で就職/日本で就職 |
| 33 | 李 | 男 | 南京 | 父 中卒 母 高卒 | 父母 自営業 | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 専門学校 | 高校~日本語学校~ 専門学校 | 帰国/再度専門学校に入学 |
| 34 | 張 | 女 | 上海 | 父 大専卒 母 職業高校 | 父 会社員 母 バイト | 無 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 専門学校 | 高校~日本語学校~ 専門学校~専門学校 | 日本で就職/就活中 |
| 35 | 焦 | 女 | 河南 | 父 高卒 母 中卒 | 父母 農業 | 有 | 職業高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 帰国 | 高校~日本語学校~帰国 | 日本で就職/結婚・バイト |
| 36 | 魏 | 女 | 河南 | 父 大専卒 母 不明 | 父 会社員(非正規) 母 銀行員 | 有 | 普通高校 | 来日直前 | 有/1.5年 | 大学 | 私立大学 | 高校~日本語学校~大学 | 日本で就職/日本で就職 |
| 37 | ヒョウ | 女 | 瀋陽 | 父 高卒 母 高卒 | 父 無職 母 工場 | 無 | 職業高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 専門学校 | 高校~日本語学校~ 専門学校~大学 | 大学卒業後就職/結婚・バイト |
| 38 | 焦 | 女 | 河南 | 父 大卒 母 高卒 | 父 出稼ぎ 母 農業 | 有 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 専門学校 | 高校~日本語学校~ 専門学校 | 不明 |
| 39 | 沈 | 女 | 江蘇 | 父 中卒 母 高卒 | 父母 自営業 | 有 | 普通高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 専門学校 | 高校~日本語学校~ 専門学校 | 大学進学/専門学校退学後不明 |
| 40 | 陳 | 男 | 福建 | 父 大専卒 母 高卒 | 父 会社員 母 無職 | 無 | 職業高校 | 来日直前 | 有/2年 | 大学 | 専門学校 | 高校~日本語学校~ 専門学校 | 就職/就職が決まらないため帰国決定 |

ら、毎日大学生たちが楽しそうに生活しているのを見て、中国の大学に進学したいと思っていた。でも両親は、物理学を勉強したいなら、アメリカか日本のほうが良いと私に強く薦めた、日本に留学すると決まった次の日、母が同僚の紹介で日本人の家庭教師を家に連れてきて、交換留学の申請もその後すぐ申し込んだ。

子どもと離れ、外国の高い学費を負担したとしても、子どもの興味ある分野で優れている大学に進学させる親は少なくない。また、「家庭教師」「交換留学」などを通じ、大学受験に必要な諸能力の重要性について親たちがよく認識している。楊のように日本の大学受験の競争性を認識したうえで、早い段階から留学の準備を始める場合が多い。

【事例2 王 (NO.2)】

中学校に入った時から、親は私を将来的に留学させたいと言ってきた。母は高校の先生で、父は大学の先生。だから中国の大学の良くないところについて私も知っている。

両親の教え子の中には、留学生も多い。学校休みで一時帰国した時、よく母は私を連れて、教え子に合わせに行く。特に日本留学を経験した母の生徒と話しているうちに、日本の大学はなかなかいいと思うようになっていた。

王の親は、「父の友人である日本の大学教授とも電話とメールでよくやりとりをして、日本の大学情報と入試のことを教えてもらった」とあるように、すでに留学経験(成功例)をもつ人と連絡を取り、情報を詳

しく集めたうえで王を日本に留学させた。

【事例3 顧 (NO.4)】

中国の大学に行くつもりがなく、ほかの受験生と競争したくないのもあって、医学部なら特に歯学部は日本のほうが有名なので、父に日本に行きなさいと言われた。母はアメリカが好きだったけど、歯学部なら瀋陽では日本の大学卒業生が人気なので。

中学校三年の時、第二外国語の授業が始まって、最初はフランス語(筆者注:を第二外国語)にしたかったけど、フランスに留学する可能性がないということから、親は日本語を選んでくれた。今考えたら、それは私と〇〇大(筆者注:通ってる大学名)の縁の始まりだったかもしれない。

当時(筆者注:中三の時点)母は、将来留学したいとき外国語を勉強し始めるのはもう遅い、早めに勉強しておいたほうが良いと言った。母自身もアメリカでMBAを取ったし、アメリカの教育は中国よりはるかに優れていると考え、母は私にアメリカに行ってほしいと思っている。でも、なんと言ったらいでしょう、私は何回もアメリカに行ったけど、食べ物は美味しくないし、人の顔にも違和感ある。それより、日本のほうがもっと親近感を感じる。中3の時、英語を第一外国語、第二外国語をフランス語か日本語にするかに結構迷ったけど、今考えたら、当時私が日本語を選んだのが縁ですよ、私はやはり日本と縁があった。

顧は中学校から私立の中高一貫校に通い始め、その学校では、高校卒業後に中国のトップ大学を目指す国

内進学コースと海外のトップ大学を目指す海外進学コースが設けられていた。顧の母自身がアメリカへの留学経験を持ち、「母からは留学しないと、絶対後悔すると言われた」と語るように、顧は母の影響により中学校の時点で中国の大学への進学を放棄し、留学のために外国語を勉強していた。

【小括】

上記の中国のエリート階層の留学生のインタビューにおいて共通しているのは、中国のエリート層の親は中国の大学よりも、海外先進国のトップ大学に子どもを留学させようとする傾向、そして留学先については日本に限定せず、世界を視野に入れている傾向、さらに早い段階で中国の子どもに留学への準備、特に言語能力の準備をし始めている傾向が見られた。経済的な余裕もあり、また親自身の留学体験あるいは職業や知識によって、留学が子どもにとってより有利だと判断し、留学させることが決まったら素早く準備を始める傾向も見られた。また、その準備の手段は様々で、言語能力、入試対策、海外での生活を含め、子どもが海外でも困らず、順調に希望大学に進学できるように、様々なルートを通じて準備を行っていた。

つけ加えると、この層の子どもは留学先の日本での学業を終えた後、帰国する傾向が見られた。楊が「瀋陽に戻ってから親が就職の面倒を見てくれる」、そして顧が「親の知り合いが多いから、帰ってから開業する」と語るように、彼らが帰国しようとする理由は、親が持っている資本を強く認識しているため、外国のトップ大学で先進的な教育を受けた後に、母国で親の力を借りて将来のキャリアを最大限に発揮しようと考えているからである。

「一流は欧米」「二流は日本」（坪井2005など）の言い方が日本社会では通説となっているが、留学生の個々の背景を掘り下げると、「アメリカの大学にも行けるが、でも日本は私にとってベストの留学先」（NO.10）と語られているように、日本のトップ大学は多くの優秀な留学生にとってかなり魅力的である。

最後に、留学先での教育達成の結果からみると、この層の留学生は全員日本のトップ大学（国立／私立）に進学できている。

4.2 中産階層の家庭における留学戦略

では、中国の中産階層の家庭は留学についてどう考えており、どのような理由で子どもを日本に留学させたのだろうか。上述したエリート階層のように、最初

から海外の大学に留学させることを考えていたならば、早い段階から留学を準備するのは自然であるが、中産階層及び後述の労働者階層の親は、最初から子どもを留学させるのではなく、日本に留学させたきっかけが「中国での受験失敗」であるケースが多い。

【事例4 常（NO.12）】

私の家庭は普通の家庭で、留学はお金かかるから、最初は中国の重点大学に行けば、将来いい仕事をして、地元で暮らせると思っていた。しかし、合格した大学は評判が普通で、親は一浪して再受験するか留学するかという2つの選択肢を私に薦めた。（中略）経済的なことなどで日本を留学先にした。欧米だとお金持ちじゃないと難しい。そして留学すると決めたあと、私は地元大学付属の外国語学院で日本語コースに通い、親が留学の手続きをしてくれた。

中国にいた時は、日本の大学は入りやすいと聞き、特に心配はなかったが、日本語学校に入ったあと、友人から日本語学校の授業だけでは不十分で、通塾の必要があると言われた。親に電話したら、すぐ塾費を送金してくれて、とにかく大学に入学できるまではお金のことを心配せず勉強に専念して、大学に入ったらアルバイトをしたいならしてもいいと親に言われた。

中国では、国内で知名度が高いいわゆる重点大学に失敗したとき、親は子どもにそのまま進学させるか、一浪して再受験させるか、それとも海外に留学させるかの選択を迫られる。常の親の場合、子どもにより良い教育を受けさせるため、合格した大学にそのまま進学させるのではなく、いずれも経済的には負担となる、一浪して再受験させることと海外に留学させることを選択した。

親が留学の手続きや日本語学校の選択を積極的に行う場合が多く、また子どもが日本で生活する費用も親が負担し、特に日本語学校に通学している間にアルバイトを経験させず、勉強に専念させる。

【事例5 華（NO.20）】

日本のほうが初期費用は安く済むし、近いから夏休みに一時帰国する際に航空券のチケットも安い。私の家にとって、欧米留学は高く留学候補に入れてない。（筆者注：地元には）日本企業も多いから、日本の大学を卒業すれば、日本企業

での就職も簡単だと親は思っているし、もちろん私もそう思う、まあ、当時はそう思った。最初は比較的有名な日本語学校を選べばいい大学に進学できると仲介会社や親戚から聞き、それで私たち（筆者注：両親と華）は安心していましたが、実際に日本にきたあと、日本語学校は受験対策をしないと分かった。親に話したら、家庭教師や塾を探なさいと言われた。

華の場合、父が弁護士で仕事が忙しく、華の教育は全部母親に任されているという。華の母親は教育熱心で、華が中国の大学受験を失敗したとはいえ、彼が地元の有名な進学校に通って学力を持っていることから、日本語を習得できれば日本のいい大学に進学できることは間違いないと安心していただろうだったが、華から大学受験対策が必要と聞いた後、華の母親は積極的に華に通塾あるいは家庭教師を雇うことを勧めた。さらに毎日電話を通じて華の勉強状況を聞き、「今度こそ受験は全力で行って、中国で知名度の高い日本の大学に進学してほしい」と話していると華は語っている。

【小括】

彼らは中国でも大学を選ばなければ大学に行けるが、親は「いい大学・いい仕事・良い人生」と認識し、留学を機に、よりいい大学に進学することを期待している。

中国は近年、経済成長が著しく、子どもを海外に留学させる経済的余裕をもつ家庭が増えてきたとはいえ、前項で分析したエリート層のように子どもを世界のトップ大学に行かせるのは、やはりごく一部の家庭に限られている。欧米に比べ、日本留学は相対的に費用が抑えられるし、また日本企業の中国進出に伴い、多くの親の日本の学歴への評価が高いことから、子どもを日本へと留学させている。

この層に該当する家庭は、最初は留学を考えていなかったため、言語能力の養成を含めた留学準備は十分に行っていなかったが、留学が決まったあと及び来日後は、子どもが順調に大学に進学できるように、親はできるだけ経済的なサポートや勉強の監督などを行っている。

インタビューの対象者のうち、この層に該当する留学生は、経済的に困ることもなく、受験勉強に専念している。日本社会では、経済的に後発国である中国からの留学生は、アルバイトと勉強を両立する必要があるというイメージがすでに根付いている。しかし、最

近の中国の経済発展が原因だと思われるが、アルバイトに頼らなくとも日本での留学生活を送れる留学生も多く、「私の周囲には、アルバイトをしない留学生がたくさんいる」(NO.16)という語りのように、アルバイトをしなければ留学生活が送れないとは考えていない留学生は一定の比率を占めている。

「中国の中でうちは上の層よりは足りないけど、下の層よりはまし」(NO.17)と本人たちも語るように、中産階層の親は、子どもが日本での努力を通じて有名大学に進学し、将来いい就職ができることを期待している。このような期待と経済力もまた、子どもに自信をと安心を与え、彼らはいいい大学を目指して来日後、日本語学校だけでなく、進学対策塾や家庭教師などを通じて、受験力を鍛えている。進学結果からみると、この分類に属する留学生の大半が親の期待通りに、中国で知名度の高い日本の大学に進学できている。

5. 日本留学に余裕がない家庭における留学戦略

中国は近年経済的な成長が著しいと報道されている一方、中国国内の経済格差が大きいことも広く知られている。子どもを留学させることが、すべての家庭、特に労働者階層の家庭と貧困層の家庭にとって、無理なく可能な選択となる日はまだまだ遠い。では、本来、子どもを留学させる余裕がなかったはずなのに、なぜそれが可能となったのか。

5.1 労働者階層の家庭における留学戦略

上述したように、労働者階層と中産階層の家庭はいずれも、子どもの中国での受験の失敗が日本留学のきっかけとなっている。しかし、中産階層の家庭では、日本での学費と生活費を親が負担できるのに対し、労働者階層の家庭では、渡日の初期費用しか負担できない親が多く、渡日後の費用は子どものアルバイト代に依存する家庭が一般的であることが、インタビューを通じて見いだされた。

【事例6 (NO.24)】

試験の成績もよくないし、そのまま進学したら就職も難しい。親は自分たちが若い時、大学に入るチャンスがなかったから、できるだけ私に大学教育を受けさせたいと言っていた。

親戚の子どもが日本に来ており、日本ならアルバイトで学費と生活費を稼ぎながら大学を卒業できると母が聞いて、うちは初期費用だけなら出せ

るし、初期費用は中国で4年間かかる大学の費用と変わらないし、だったら日本に行って、日本の学歴を得れば、将来の就職も保障されるし、日本留学のほうがいいということになった。出発（筆者注：渡日）の日、空港で親に、貯金を崩して全部留学の初期費用に使いきったと言われた。あとは自分でアルバイトするしかない。親にたくさんのお金を出してもらっていたから、私はその時から日本で頑張っているいい大学に入ると志した。

陳のような労働者家庭では、親が安定した仕事を持っていれば、子どもの日本留学に必要な初期費用は出せるが、留學生活を送るためのすべての費用は負担できない。言い換えれば、留學先でアルバイトできる制度がなかったら、陳の親は陳を日本に留學させられなかった可能性が高い。陳は日本語学校に在籍しながら、居酒屋でのアルバイトの給料で自分の生活費と大学の学費を準備し、日本語学校を卒業後に大学に進学し、現在もアルバイトの給料で留學生活を送っている。

一方、労働者階層出身の包（NO.27）の親は、借金までして包を塾に通わせていた。

【事例7 包（NO.27）】

家にもう余裕がないと分かっているけど、ほかの人が通塾しているから、自分が行かないとやはり負ける。親に相談したら、親も私と同じような考えだったが、塾の費用は高いから、（筆者注：親が）親戚のところからお金を借りてきてくれた。あと日本語学校と塾の授業がない時、私はほとんどアルバイトをしていた。

生活費だけでなく、大学受験の費用や大学初年度の学費も用意しなければならぬため、包は受験勉強とアルバイトを両立して、決して楽な留學生活を送っているわけではない。しかし彼女が話しているように「日本語学校のクラスメイトは塾に来たくても（筆者注：お金に余裕がないため）来られない留學生が多い、彼女に比べたら私のほうがまだ恵まれている」。彼女はその後第一希望の大学に落ちたが、比較的納得できる大学に入学し、今は月5万円弱の奨学金を得て、アルバイトで留學生活を送っている。元々大学卒業後アメリカの大学院に行きたいと語っていたが、最後は経済的な面から断念し、中国の地元の日本企業に就職した。

アルバイトと勉強の両立は容易なことではない。留學生は勉強の時間を削ってアルバイトをし、それが結

果的に学業に影響を与えたため、中国での大学受験に続いて日本でもう一回受験失敗を味わった2事例がある（NO.28, NO.30）。

【事例8 王（NO.28）】

親からもうお金をもらえないからアルバイトをしないと学費を払えない。勉強したいけど、アルバイトが終わったらすぐ疲れてしまう。授業中はすごく眠い。アルバイトをしない人は羨ましい。

王は「昼間の授業中に居眠りしたり、日本語学校を休んだり」することが日常的にあると語っていた。勉強する時間が足りないため、受験した大学にも受からなかった。王は「このまま帰国するのは恥ずかしい」と語り、日本語学校を卒業後に専門学校に不本意入学し、翌年もう一回大学受験をチャレンジした結果、最後は無事に合格し、今は「大学の勉強とアルバイトの毎日」と表現されるような留學生活を送っていると語っている。

【小括】

分析結果から、労働者階層でも、先述した中産階層の家庭にとっても、子どもの中国での大学受験失敗が留學させるきっかけとなっている。一方、中産階級の親は、子どもの日本留學費用を負担できるのに対し、労働者階層の家庭では、日本留學の初期費用程度しか負担できず、以降の費用は子どものアルバイト代で賄うことに期待している。総じて見ると、親ができるだけ子どもに経済的支援（通塾費用を含む）を行っている様子も見られたが、ほとんどの場合、労働者階層出身の留學生はアルバイトの必要性を強く意識し、アルバイトと勉強の両立に苦しんでいる。

また、労働者階層の家庭では、「将来の就職に有利な大学に行ってほしい」と親に言われる留學生が多いが、実際のインタビューでは、特に来日後、親は勉強のことより、子どもの経済的なことや健康的なことをより心配するということが多く聞かれた。アルバイトをしている子どもへの心配が原因だと思われるが、「親は日本のことよくわからない」（NO.23）と呉が語るように、労働者階層の親たちにとって、子どもを外国に留學させたのが精一杯で、そこから先は自分にとり未知の世界であり、あとは子どもの努力しか期待できないことも背景にあると考えられる。

5.2 貧困階層の家庭における留学戦略

最後に、中国の中でも比較的貧困層に含まれる家庭の事例を見てみよう。

普通に考えれば、貧困層には先進国への留学の可能性は少ない。本稿の冒頭で述べたように、平野(2007)は移動の可能性の多寡に注目し、移動者を「国際移動をする余裕のある人々」と「国際移動をせざるを得ない人々」と分類している。移動には様々な理由がありうるが、留学とは学ぶこと、言い換えれば教育を消費することを目的としている。貧困層の家庭が、わざわざ子どもを外国に行かせ、外国で教育を消費させるという選択をとることには、一体どのような戦略が潜んでいるのだろうか。

【事例9 ヒョウ (NO.37)】

(筆者注：日本では) アルバイトできるから、学校に通いながらアルバイトをして、貯金したら親に仕送りもできる、10万元(筆者注：インタビュー同時10万元は120万円相当)の借金も私が返さないといけない。

そのまま中国にいと、多分貧しい生活しかできない、親は私を自分たちのように苦勞させたくないから、留学を通じて日本で滞在することを実現した。

大学にももちろん入りたいけど、受験するための能力はまだない。勉強する時間がほしいけど。

ヒョウのような貧困層の家庭では、子どもに留学させる経済的能力はない、しかし、借金までして子どもを日本に行かせる理由は、「稼ぎ」のためであった。子どもを留学というルートを利用して出国させ、中国での貧困生活から脱出させることを期待している。

ヒョウは勉強よりもアルバイトを重視し、ビザ更新に必要な出席率を確保したうえで、アルバイトを中心とした毎日を送っている。日本語学校の2年間の間、ヒョウは留学のための借金120万円を全額返済し、その後は定期的に親に仕送りもしているという。

ヒョウは「できれば在学期間を長くし、日本での滞在期間を伸ばしたい」と語り、日本語学校を卒業後に大学には受からなかったが、専門学校に進学し、その卒業後に大学に進学できた。大学在学中はインターネットの見合いサイトで自分より20歳年上の日本人の男性と知り合い、卒業後にその男性と結婚し、今もアルバイトを続けている。ヒョウは自分の留学について、「留学は国を出る手段として考えている」「自分の

稼ぎで親たちにもより裕福な生活をさせたい」と語っており、勉強よりも、日本に滞在するための手段として留学を考えている。

【事例10 陳 (NO.40)】

ちょっと勉強すれば大学に入ると聞いたけど、実際は違う。日本の会社の正社員になりたいけど、大学の学歴がないと就職もできない。

借金の返済はまだ終わってない。親にはこのまま帰ってほしくないと言われたけど、僕は日本でどうすれば滞在し続けることができるのかについてわからない。

親？親は日本にくれば天国に入ったとずっと思っているよ、でも現実とは違う。日本はもう20年前の日本ではない。今は円安で全然稼げない。

陳は来日後、アルバイトを中心とした毎日を送っていた。それゆえ、日本語も勉強せず、大学には入れず専門学校に入学した。「中国人ばかりの学校で、だれも勉強しない」と陳が語るように、陳が通う専門学校は陳のような留学生が大半で、勉強の雰囲気になかったという。ほかの留学生も経済的に余裕がないようで、みんなひたすらアルバイトで稼ぐことに集中している。

【小括】

この層に該当する家庭は、中国の中でも決して経済的に余裕がある家庭とはいえない。「うちが中国の大学の学費も出せない」(NO.32)という発言のように、本来このような家庭状況では子どもを留学させられる可能性は極めて低い。しかし、日本ではアルバイトができるので、子どもを留学させれば、アルバイト代で留学の費用だけでなく、中国への仕送りもできると思う親が多く、それで多額の借金をして子どもを留学させたのである。しかし、現実には厳しく、長期間のアルバイトと勉強の両立は極めて困難である。日本語学校の学費や生活費に加え、彼らは大学などに進学する初年度の費用も稼がねばならない。このように、彼らは来日後に親からの支援がなく、日本で勉強よりもむしろ経済的に追い詰められ、退学や、さらには犯罪にいたるケースもある。今回の調査のなか、この層に該当するのは9事例であったが、日本語学校を卒業する時点で希望通りに大学に進学したのは2事例しか過ぎず、アルバイトに集中していたことが原因で多くの留学生は勉強を諦めざるを得なかった。これらの留学生の教育達成が最も低く、そして現在の状態を確認した

ところ、途中でアルバイトと勉強の両立ができなくなり、退学し不法滞在になったり、そのまま出席せず行方不明になったり、結婚相手が見つかるとうすぐ結婚して退学する事例が多い。さらに、卒業後に日本で就職したくても日本で就職できる能力を身につけることができず、苦勞している姿が見られる。

6. 結語

中国の親は、多様な期待を持ち、子どもを日本に留学させている。留学生の進学達成からみると、家庭背景の異なる留学生たちは日本での進学において大きな違いが見られる。言い換えれば、親の教育投資と教育期待が、留学生の教育達成に大きく規定している。

本稿では、経済的な側面からまず留学生を「日本留学に余裕がある層」と「日本留学に余裕がない層」の2つの層に整理し、さらに「日本留学に余裕がある層」を「エリート階層出身の留学生」と「中産階層出身の留学生」に、また「日本留学に余裕がない層」から「労働者階層出身の留学生」と「貧困層出身の留学生」に分類して分析を行った。図2は各層における親の教育期待を整理したものである。

一口に中国からの留学生といっても、中国人留学生を一枚岩としてとて扱うことはできない。毎年、多数の若い中国人留学生が日本を訪れ、彼らはそれぞれの夢を見て日本での進学を試みる。本稿で明らかにしたのは、異なる層の親は子どもの日本留学について異なる期待を持ち、また親の期待と留学に向けての教育への投資の多寡が、子どもの日本における教育達成に大きな影響を与えているということである。留学に余

裕のある家庭の留学生と、留学に余裕のない家庭の留学生との間で、教育達成には大きな差が見られ、経済的に余裕のある、そして親の教育期待の高い家庭の留学生ほど、日本における教育達成に成功している。具体的に言えば、エリート層の親たちは、子どもたちにエリートになってもらうため、早い段階から留学の準備をし、子どもを世界レベルの大学に進学させる。中産階層の親たちは、日本に留学させる余裕を持ち、積極的に子どもを知名度の高い日本の大学に進学させる。労働者階層の親たちは、アルバイトができる日本の留学制度を利用し、子どもがアルバイトをして学費などを稼ぐことを前提にできれば就職有利な大学に進学してほしいと期待する。最後に本来留学の余裕がない中国の貧困層の親にとって、豊かな先進国日本自身が魅力となり、留学を通じて子どもを日本へと移動させる。

平野 (2007)¹⁴⁾は移動者を「国際移動をする余裕のある人々」と「国際移動をせざるを得ない人々」と分類している。日本は移民国家ではないと周知されているが、留学の門は多くの層の学生に開かれている。そして、ほとんどの留学生は、日本留学の広々とした門から、希望のオアシスを覗き見ている。日本の留学制度の構造は、このように、階層的に閉ざされた留学受け入れ制度ではなく、幅広い層が留学できるという光を、中国の親及び留学生に見せている。しかし、中国の労働者階層と貧困層の家庭の留学生にとっては、日本でアルバイトをしながら勉強するという前提なしでは、留学は不可能であった可能性が極めて高い。そして、インタビューで明らかになったように、「日本ではアルバイトしながら勉強できる」というのは架空の

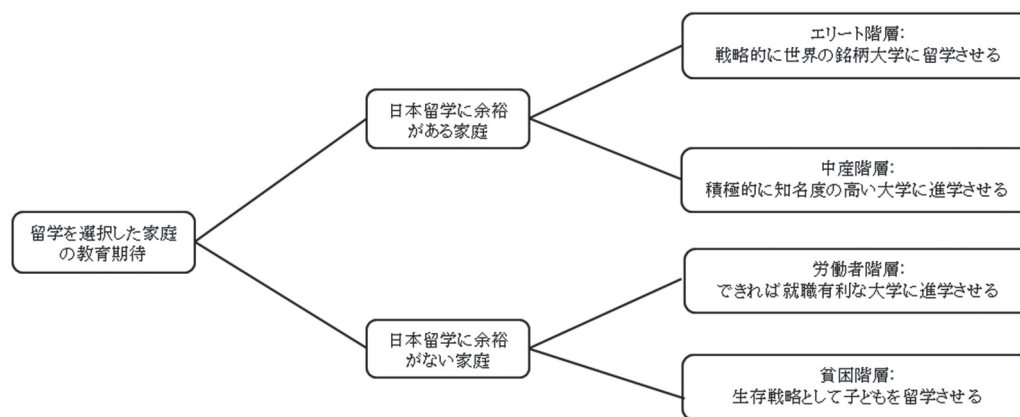


図2 各階層における親の教育期待

ものにすぎない。一見、階層的に閉ざされていない日本の留学制度には大きな穴が潜んでおり、特に経済的に余裕のない留学生ほど、その穴に落ちやすいのである。

注

- 1) Held, David, & McGrew, Anthony, & Goldblatt, David, & Perraton, Jonathan., 1990, "Politics, Economics and Culture, Stanford University Press "Global Transformations (＝2006古城利明・井久和・滝田竜治・星野智編訳『グローバル・トランスフォーメーション—政治・経済・文化』, 中央大学出版部)。
- 2) 平野健一郎, 2008, 「新しいアジアの留学地図とその意味」『アジア研究』JAASアジア政経学会 第54巻, 第4号, pp.3-9。
- 3) IDP, 2003, Global Student Mobility 2025: *Analysis of Global Competition and Share*, IDP Education, Camberra.(<http://www.idp.com/global/studyabroad>, 2014年8月30日閲覧)。
- 4) Richters, E. & Teichler, Ulrich, 2006, "Student mobility date:Current methodological issues and future prospects" in Kelo, Maria, Ulrich Teichler & Bernd Waechter (eds.) *EURODATA:Student mobility in European higher education*, Academic Cooperation Association, Bonn, Germany: Lemmens Verlag, pp.78-95.
- 5) De Wit, Hans, Pawan Agarwal, Mohsen Elmahdy Said, Molatlhegi T.Sehooole and Muhammad Sirozi(eds.), 2008, *The Dynamics of International Student Circulation in a Global Context*, Sense Publishers, The Netherlands.
- 6) 杉村美紀, 2010 「高等教育の国際化と留学生移動の変容:マレーシアにおける留学生移動のトランジット化」『上智大学教育学論集』第44巻, pp.37-50。
- 7) Education at a Glanc, 2006, <http://www.oecd.org/education/skills-beyond-school/37376068.pdf>(2011年8月21日閲覧)
- 8) 独立行政法人日本学生支援機構, 2014, 「平成25年度外国人留学生在籍状況調査結果」 http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data13.html (2014年9月2日閲覧)
- 9) 坪井健, 2006, 「在日中国人留学生の動向と今後の課題—中国と日本の留学生政策を背景に—」『駒澤社会学研究』駒澤大学文学部 第38号, pp.1-22。
- 10) 浅野慎一, 2004, 『中国人留学生・就学生の実態と受け入れ政策の転換』労働法律旬報 NO.1576, 旬報社, pp.9-20。
- 11) 文部科学省, 2008, 『「留学生30万人計画」骨子』
- 12) 経済産業省, 2008, 『通商白書2008』。
- 13) Bauman, P., 1998, *Globalization:The Human Consequences*, Cambridge Polity Press.(＝2010 澤田真治・中井愛子訳『グローバルゼーション—人間への影響』法政大学出版会。)
- 14) 平野健一郎, 2007, 「東アジアにおける人々の国際移動」西川潤・平野健一郎編『国際移動と社会変容』岩波書店, pp.54-125。
- 15) Hage, Ghassan., 2005. "A Not Multi-Sitide Ethnography of a Not So Imagined Community," *Anthropological Theory*, Vol.5 No.4 : pp.463-475.
- 16) ハージ・ガッサン, 塩原良和訳, 2007, 「存在論的移動のエスノグラフィー」伊豫谷登士翁編『移動から場所を問う—現代移民研

究の課題』有信堂, pp.27-49。

- 17) 小内透, 2005, 『教育と不平等の社会理論—再生産論を超えて』東信堂。
- 18) Bourdieu, Pierre. 1979. *La distinction: Critique sociale du judgement*. Paris: Minuit.(＝1990 石井洋二郎訳『ディスタンクシオン』藤原書店。)
- 19) 片岡栄美, 2001, 「教育達成過程における家族の教育戦略—文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に—」日本教育学会『教育学研究』68(3): 259-273.
- 20) Waters, Johanna l 2006. "Geographies of cultural capital : education, international migration and family strategies between Hong Kong and Canada" *Trans Inst Br Geogr NS* 31: 179-192.
- 21) 張建, 2007, 「中国都市部における高校段階教育の格差と階層」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第47巻, pp.461-470。

(指導教員 本田由紀教授)